

谷川雁の組織論

私の抜書き

工 自立組織の構成法(「戦斗への招待」171頁。以下)

下の引用は全て同書(から)

日本民主主義の諸悪の根源——いわゆるへ民主集中性Vのいかさまに對して、それは激しく抗ギし

抗ギを運動の形で現わそうとしてゐる。労働組の結

成という観念は、青年を中心とする行動組織の結

成という観念は、炭労働部が切った。たゞ指導を

シニカニし、三池の青年隊にまで大きな反響をよ

んでゐる。うらみ深きかの「統一と團結論」は、

安藤と三池の敗北からくる停滞した空気をうち破

つてひこすい清利な空気を送りこんだ。この新しい

大衆組織と、それが提供する新しい組織原理によ

つてワクを破られた。この組織の三原則——

(一)あくまで労働組の統制から自立したものである。

(二)労働組の決定は、それが下部労働者の基本的原理

——某會論結社などの自由——を侵害しないかぎり

積極的に公然とその先鋒に立つこと。

(三)しかしながら、それによつて労働組材肉の方針に

對する批判をいささかも制限することなく、徹底

的でないデオロギー斗争をすること共に、それを支

え独自の行動とすること。

る独自の行動とすること。

この行動組織は当初から労働組の多数決原理が少数派

を無視し抑圧して、いかさまの民主集中制にたうく

するのを防ごうとしてゐる。しかる少数派の見解を

いかにして鮮明に守り抜くかといふことに重点が

けられており、従来疑心を抱いたれないままに通用し

てきた民主集中制といふものが欺瞞でしかないこと

を大衆に自覚させ、多数決代や方式の中に自立した

直接民主制を生かそうとしてゐるのである。即ち

まず自分自身が多数による組織の正当性を否定

するものだから、単純に多数決原理によることなく

構成されなければならぬ。

どうすればそれが可能となるだろうか。階級と

の激しい緊急の対決のなかで、常に構成員全員が直

接の意志表示を求め、それにもとづいて各自が賛成

のばあいは行動し、反対者はその行動を留保する

といふたことは現実にはつとて適合するとは限らない。

しかしながら、それを理由として無条件に多数決原

理を拡大適用するならば、直ちに今日見るような「

上官の命令は朕の命令」という天皇制論理の再現と

なる。下部の自由を拡大しなからんが分教主義におちい

らなければならぬ。

そのイデオログたちの思想のあいまいと肉體性
はくろした。にわかかわらず、それはいまだ舊態組織
原理を現実の場に具現化してみせることはできなかった。而も
その点では、いかに初歩的にしてコッケイなものであり
うとも、労働組合のなかからそれのりこえようとして
あつた、また擬似軍隊の意義を私は評価する。バルタ
イでもなければ、労働組合そのものでなく、また舊態
された理念の走向にすぎない統一戦線でもなく、それ
れが既成の定型を溶かすつぼとなり、またそこから変
革の道具としての新しい定型をこころにまみせること
のできる原組織、組織以前のものであり、組織以上のも
のであるような自律的運動は、二人にのみみられる一
定の段階において革命的な役割を果すにたがひない。さ
らに、(同。51頁。)

以上の分析をふまえて、私はへきしい危険に陥して
向をむすべしなことをいふに逆くのである。か
重大な変化が六十一年の前半に起つた。既成の旧体制
障壁は総体として反体制ではなくなり、た、その主観的意
向はどのようにあるとも、既成反体制組織は客観的に大
政變實現化、産業革命化しつつある。それは部分的に支
持と資本の積集射撃部隊として再編成される危機が迫つて
いる。危機の突体は単なる官僚化や単なる専横主義ではな
い。存在のトータルな変質にかかわるものである。、、
とすれば、独占支配の全体系を否定しようとする運動は
さしあつて、既成の反体制組織から自立した道とあつて
りしかはなない。今日の政治的類型は一見、綱領の分裂とい
う形をとつて、いさうに異なるけれども、それは実のところ
綱領の目的というよりは、綱領を以て綱領たらしめる認
識の土台に基きかかわつており、この認識論的分裂を
しかつて綱領や組織の存在を認められたい。か、
つたにその上をこぼれしゆらこれらだけである。

もろろ綱領の不確定が望ましく、いふのではない。し
かし、二つの綱領をなすべからず極力主張した集中的な
運動の可能性は、彼がそれすべからざる段階における無定型の運
動の必死な存在をこころを裏の上に成立してしたのである。

共同行動である。当然に組織原理としての多数決の拘束は
一定の条件のもとに拘束されなければならない。
ひとりの人間はイデオログとして存在すると共に行動
者として存在する。イデオログとしての彼のエネルギー
はニヒルに、行動者としてはアナーキーに噴出する。変革
する労働者の思想はその断片の上を歩いていく。いまのこ
ころ、私たちがこの断片をぬい合せてしようイデオロギ
ーとけことごとく斗わざるを得ない。斗いはこの断片にす
べてを賭ける者、その賭けから離脱する者との間に進行
する。こちら側には固定した指導体系がなく、状況がたか
に縮成しなおされるイデオログ集団しかないのである。ま
た状況がたかたえうが取られる行動者集団の種の連合しか
ないだろう。そして斗いの推移につれて協同・ハンチチュウ
は狭くなり、細く強靱な一本の糸だけをのこすにすぎない
なるだろう。長い苦しみの中の、人びとが対立と協同が同
義語であるような、そのような世界を發見するかもしれない
。そのとき人びとが一転して、いや、順当にバルタイ的果
中を求むるであろう。しかしそのバルタイとは、今日、パ

とを忘れてはならない。それは認識論的側面を考へること
である。またわが国の反体制運動の歴史を止揚していく
道である。いふまでもなく、それは清算主義的解体への
危険を含む。にもかかわらず、すべてのバルタイ的果中
が綱領認識の確定化を急ぐあまりに認識論的モノの検討
を怠り、思想運動の性格を失つて、身ぐるみ自己を売り
渡す必然のサイクルから脱出できないでいるとき、私た
ちはその橋を渡ることためらうわけにはいかなない。し
たが、目下のところ存在している必然にして可能な道
は、反バルタイ的果中、反集中的運動よりほかはない。
。二のような運動けまや個々のイデオログたちつ反
バルタイ的連合からはじめられなければならない。
さらにこの運動は、反バルタイ、反イデオロギーとし
てあらわしてくる大衆の自立運動を促進し、そこに行動
的な世界を形成させなければならぬ。彼らに今必要なの
は指令系統のなご組織であり、内題のたかこにイデ
オログがその集団の提供する方向といやおうなし
に自分自身で撰択し、個々の撰択の上に立つてなされる

一(ク)

ルタイ概念とは縁もゆかりもない反ルタイ的ルタイ Ⅳ 綱領的認識への信託

であるはずである。 Ⅱ (同、55頁)

(*) 六月十五日夜、国会と首相官邸の周辺はふたつのデモ隊のウズにまかされていた。一方では、ついでに鼻の先で流血の衝突がおこり、負傷者が続出し、他方では労働者、市民、文化組織の整然たる(原文のまま)行列が流れてゆき、その境では日本共産党員が、ふたつの派が合流するのをさまたげている。其裏があった。そのとまわしたと、さういふ闘いが国会にあること、痛真部をのりこえて国会周辺に立ちこむことを流れてゆくデモ隊に許さなから、共産党員のピリ隊と小衝突を繰り返していた。 Ⅲ (「民主主義の神話」 45頁)

「前記がある」と認める者と、「前記がない」と認める者の間に論理的には対話の可能性はない。それは互に相手を持ち倒すまで斗わなければならぬ。しかし対話の形式であるように、斗いも又対話の一形式である。そして斗いの形式が墮落するならば斗う者の双方がともに腐蝕するところに斗いのつらさがある。そのつらさがかみしめずに経過する斗いがあるとすれば、それは真の斗いではないがゆえに不毛である。 Ⅳ 最初にいやおうなくつみこられる。は、「ある」といふしとの闘いの対話性に意を二重に一つに絞る。代々本もな、それだけいへい自分を支持するエネルギーを大きくするたりの技術として必要だといふ立場である。代々本もポイントもそのまではポイントに一致している。自分と違ふかの反対か、この闘いの崩壊こそが今日、時点であるの。 Ⅴ 函平が違ふにまわっているのだ。 Ⅵ 理由はかんたんである。それは綱領的認識のスタイルだ。 Ⅶ 闘いの神だからである。綱領がそもそも未完のもの

一面

への水久の追求である。これを知らない共産党は、完結してない綱領と前記性のギャップを規律の体系性で埋めたてようとしている。未完の綱領と綱領の未完性を混同しながら出発した同盟は、いつのまにか綱領の完結性を信じてこみ、綱領の本来的な未完結性への追求を放棄した。いすれの側もいま噴出して、前記があるとした。是への懸望と、「前記がない」空白への餓渇との対立を総体としてとらえていなく、それぞれに偏った綱領的認識の整序法があるだけである。

綱領的認識がもつとも警戒しなければならぬのは、それだけが唯一の認識法ではないという点である。認識論は人格の分裂を承認しなへかぎり単一であるべきだろ。しかしし認識の発生過程はひとりの人格のなかに、常に複数の系を持つ。その事実を含まない認識論はどこまで無効である。二の無自覚の上に戦闘性をきかすこととする愚かしさをいつまで続けるのか。 Ⅷ 「前記の不在をめぐって」 61-63頁、Ⅰ

Ⅳ 共産主義者同志会

「分組の統制から自立し、分組が組合員一般に指示する行動には常に先頭に立ちながらも、分組の妥協的方針を公然と批判して活動する青年行動隊——それを指導する匿名者と闘争者と新しい参加者からなる自立した集団とである。 Ⅰ 三池ホッパの前で音もなく崩れ去った二つの自衛集団、そのにがい経験のなからこの組織方法はうまれた。あの場では必要であったのか。共産党はあつせんに応じる回答がなされるまで一言も発しなかった。同盟はあつせんも拒否せよとさげんだが、大衆討論を組織しなかった。労働者は黙々として上部集団の統制にしたがった。この不毛のうち破るのは何か。労働組合を可能な限り直接民主制に近づけるための行動集団を形成し、たとえ少数であろうと下部労働者の意識の自立と言論の自由を確保することこそ結論であった。 Ⅱ 破局に瀕した経験のなかへさな経験が海のものとかなるか山のものとかなるか、そむく人それらわらわら。しかしその中には前記の構成法に対応する、大衆組織の構成法に因する新しい暗示が含まれていると私に告げる。 Ⅲ 「

前夜の不在をめぐって（加）

にせよ彼のなかに新しさと成熟とも同時に成立しめねばならぬ賭けの場があったことだけは確かである。（一）知

ある説 向——展望とは何か、ワルツと踊るし
ニニに展望があったが、種彦によつて叛かれたるとは
公たとはニニに七十才の革命家と十五才の革命家が
いて、... というのは革命家とは何者か良くわからな
いのでそういうのが、... 同一の用語で革命について
論じたという。長へ対話のあとで、二人の談話藝術は
びたりと一致した。だがそのとき一つの箇面が両者の口
から同時に発せられた。それは「成熟した革命思想とい
うのはすでに一つの準備を思ひますか、でもよければ、
未熟な革命性を分つ基準は何でしようか、でもよい。ヤム
放たれた笑はたがいに衝動したまま、両者の中心に落ち
るだろう。そニには十月革命がハリ、コミニョーニより
毛刺時間長生きましたとわかつた日に、雪の上に走り出て
ワルツを踊ったというしーニニが直っている。彼がなか
にすんでいた老人と少年はとんがれつきあつていた。月
だろう。おそろく老人はきりぎりした眼つきで早のにし
やべり、少年はあくばかりして「いや、いすん、ないこと
であつて、しーニニの片眼はすくなくとも数時間

にせよ彼のなかに新しさと成熟とも同時に成立しめねばならぬ賭けの場があったことだけは確かである。（一）知
識人と私のちがひ（加頁）
（加）老人の頭の中で「展望が... ぱいしである。そして少
年にとつて「展望」は退屈なのである。
公もと彼が十月革命はハリ、コミニョーニより長生さす
るといふ状況を先取してはたならば、何ぞワルツを踊った
りする必要はなかつたのだ。数カ月の先だつて彼はそれ
先取してはたわけてはなかつた。というよりも先取する必
要がなかつたし、する気もなかつたであらう。ひたすらニ
にになく、たゞん彼は数時間あつくらひの状況の先取に
かを賭してはたわけてはあまゝい。そニに私は実行さす
らも。の希望と絶望、あえて放棄する部分としつて部分の
いっしょくたになつた塊りを見る心地が、多のだが、数カ
月は、たしかに教しつて叛かれたりいなければ、
ないことであつて、しーニニの片眼はすくなくとも数時間

おきに、その種彦の目盛りにうみ続けへたにちがひ
ない。花田清輝が長期のインクローナリズムを唱え
吉本隆明が五年の射程を唱えるのに対して、私は数時間
の尺度を主張するといふのではない。時間や空間のもの
を、巨視的なものが微視的に、微視的なものが巨
視的にみえる、とてつてなへ不断的の倒錯といふ構えがあ
りさすす上げえ分ではなからうか。それよりも、反動思
想のなだらかな裾野をつさるところから、変革思想の山
脈が起り始めるといふたう説教したたか、敢て「変
革思想」の最高の反動思想はハナもつさ合はせいで、
ているという定式もいまこそ改調すべきだと思ふ。
(同。90頁)

オタイクツサマ
一九二一 七 十五

